

目錄學序說

志村尚夫著

目録学序説

—原理と事例からのアプローチ—

志 村 尚 夫 著

学芸図書株式会社

著者略歴

1930年12月新潟県に生れる。早稲田大学法学部卒業，図書館職員養成所卒業，東京大学図書館を経て，現職 図書館短期大学助教授「目録法上級」「資料組織論上級」「図書館機械化演習」などを担当。主要論文（著書）「Classification system の記号の分析」「Indexing system における分類法原理の適用」「現代資料目録論」現在 日本図書館協会分類委員 現住所 〒188 東京都保谷市新町 6—2—18 電話0422—54—3921

目 録 学 序 説

—原理と事例からのアプローチ—

¥ 3200

昭和53年12月22日初版発行

著 者 志 村 尚 夫
発行者 学芸図書株式会社
代表者 北 本 幾右衛門

発行所 学芸図書株式会社
〒101

東京都千代田区神田錦町 1—16
電話(291)3023・3887 振替東京 9-96491

3000—00901—1001

検印省略

まえがき

今日、目録法はさまざまな視点から語られようとしている。それは、国際的な書誌組織の面から、また索引法的立場から、さらに基本記入の評価についての観点からなされている。

ここに、目録法の原理と歴史について筆者なりの考察と、新しい図書館学からみた目録法の体系化の構想をいだいてから、早くも数カ年の歳月が経ち、また収集した文献や講義ノートをまとめる必要に迫られて、ようやく本書が出版社の賛同を得て刊行される運びとなったことをまず申し上げたい。

本書は、ほぼ全章にわたって目録法の理論およびその特性を考察したものであり、いわゆる How to 的な実務書ではない。本文中に幾多の事例を挙げているが、これは各テーマの特性を理解する上で必要だからである、何故なら、目録法は、理論とそれを現実的にどう具現するかということと不可分であるからである。

目録法をどう理論づけ、どのように構成するかは、さまざまな手法があるであろう。本書は、次の2つの点に留意して論を進めてみた。一つは、比較目録法的手法を用いて、目録の特性をより明確にしようと試みたことである。他の一つは、システムの考えの面から目録法のそれぞれのしくみを取り上げたことである。

叙述にあたって用語の統一には、非常に苦勞した。できるだけわかりやすい訳語を用いたが、簡潔を期するため原語などをそのまま用いた個所もある。また歴史についてもできるだけ現代の目録法の慣行の基礎あるいは原形となった前史的な時代を重点的に挙げてみた。各章について、不十分な点、不備な点があることをおわびしたい。

最後に、本書の刊行にあたって、多くの方々のご教示をいただいたこと、また学芸図書株式会社の方々の熱意に対して、心から感謝の意を申し上げる。

昭和53年11月

著 者

目 次

まえがき

第 I 部 序論と目録の機能

第 1 章 図書館システムにおける目録の役割

- 1—1 情報化社会と図書館…………… 7
- 1—2 資料の組織化の背景…………… 10
 - (1)文献の増大——(2)文献に現れた言語の問題——(3)文献の複雑性——(4)文献の求め方の複雑性
- 1—3 目録法の研究とその方法論…………… 15
 - (1)目録法を機能的にアプローチする方法——(2)目録法を書誌組織の面からアプローチする方法——(3)目録法を索引システムとしてアプローチする方法

第 2 章 目録の機能

- 2—1 目録の定義…………… 18
- 2—2 文献にアプローチする 2 つの方法…………… 19
 - (1)文献のもつ性格——(2)文献検索の直接アプローチと間接アプローチ
- 2—3 目録の機能…………… 24
 - (1)書誌の組織化と目録——(2)図書館目録の機能——(3)シェーラの目録機能——(4)カッターの目録の機能——(5)ICCPの目録の機能——(6)識別機能——(7)所在指示機能

第 3 章 目録の種類

- 3—1 目録の基本的条件…………… 42
 - (1)目録の必要条件——(2)ワイナーの目録の基本的条件——(3)ペークウェルの目録の基本的条件
- 3—2 形態上からみた目録の型…………… 44
 - (1)カード目録——(2)冊子目録——(3)カード目録と冊子目録の問題点——(4)シーフ目録——(5)マッキュアリーの日録の比較

第 4 章 目録と書誌と索引

- 4—1 目録と書誌…………… 59

	(1)書誌とは——(2)書誌の歴史的側面——(3)目録と書誌の比較	
4-2	目録と索引	67
	(1)索引とは——(2)索引の種類——(3)索引と目録の比較	

第Ⅱ部 目録法の歴史

第1章	目録の変遷の区分	78
第2章	財産目録の時代	
2-1	タブレットとピナクス	80
2-2	修道院図書館の目録	82
2-3	15世紀の図書増大と目録	83
第3章	ファインディング・リストの時代	
3-1	トリタイムの書誌	84
3-2	ゲスナー、トレフラス、マウンセルの系譜	84
	(1)ゲスナー——(2)トレフラス——(3)マウンセル	
3-3	ボードレアン図書館の目録	88
第4章	現代前期の目録	
4-1	大英博物館図書館の目録とパニッチの91カ条	91
	(1)大英博物館の“The Battle of the rules”——(2)パニッチ の目録規則91カ条の誕生	
4-2	ジエットの目録構想と規則	96
	(1)目録構想と経緯——(2)ジエットの目録思想——(3)ジエットの 目録規則の特性	
4-3	カッターの辞書体目録編纂規則とボストン・アセニウム目録	101
	(1)ボストン・アセニアムの目録の経緯——(2)ボストン・アセニ ウム目録の特性	
4-4	カッターの辞書体目録編纂規則	104
4-5	デューイの分類法	106
第5章	現代後期の目録	
5-1	“英・米コード1908年版”の特色	107
	(1)アメリカ版とイギリス版の相違——(2)“英・米コード1908年 版”の批判	
5-2	“ALA目録規則1941年予備版”について	110
5-3	“ALA目録規則1949年版”について	111

5—4	“プロシヤ目録規則1908年版”(Prussian Instructions)について……………112
	(1)プロシヤ目録の概念——(2)プロシヤ目録の特色

5—5	ヴァチカン規則の概観……………115
-----	--------------------

第6章 わが国の目録の変遷

6—1	日本国見在書目録……………116
-----	------------------

6—2	本朝書籍目録……………117
-----	----------------

6—3	明治前期の目録……………118
-----	-----------------

6—4	和英図書目録編纂規則……………120
-----	--------------------

6—5	和漢図書目録編纂概則……………122
-----	--------------------

6—6	和漢図書目録法……………124
-----	-----------------

(1)目録法調査委員会発足——(2)和漢図書目録法の構成——(3)和漢図書目録法の批判

6—7	編纂規則(文庫協会)から目録法(委員会案)までの変遷……………131
-----	------------------------------------

第三部 目録と記述

第1章 資料組織化の過程と書誌的構成

1—1	目録作業の方法……………136
-----	-----------------

(1)ピンヨップの目録担当者の資質

1—2	収集からファイルまでの処理組織の型……………138
-----	---------------------------

(1)目録作業の方法——(2)縦割型——(3)横割型——(4)集中型——

(5)収集からファイルまでのフローチャート

1—3	オズボーンの目録作業理論……………145
-----	----------------------

(1)条文遵法主義理論——(2)完全主義理論——(3)書誌学的理論——(4)実用的理論

第2章 文献の書誌的構成……………149

(1)目録法の観点からの図書資料の読み方——(2)図書の各部の名称と情報源——(3)その他

第3章 書誌記述

3—1	記述の経緯と構成……………155
-----	------------------

(1)記述の目的——(2)文献形態による書誌記述の必要度——(3)記述の追い込み方式と固定方式——(4)情報源の優先順位——(5)記述の順序

3—2	I S B D (M)の経緯と構成……………165
-----	---------------------------

(1)経緯について——(2)I S B D (M)の構成——(2)句読法に

ついて

第4章 NCR新版とNCR1965年版の記述の比較

- 4-1 目的と基本的性格……………176
 - (1)NCR新版——(2)NCR1965年版
- 4-2 NCR新版とNCR1965年版との比較……………178
- 4-3 記述についてのコメント……………190
 - (1)記述の範囲と対象——(2)記述の情報源——(3)記述すべき書誌
 的事項と記載順序——(4)記述の文字・数字——(5)記載形式と句
 読法——(6)書名——(7)著者表示——(8)版表示——(9)出版事項—
 —(10)対照事項——(11)シリーズ表示と注記——(12)ISBN, 装
 丁, 定価

第5章 記述と書誌レベル

- 5-1 記述すべき対象と書誌レベル……………215
- 5-2 NISTの書誌記述と書誌レベル……………217

第IV部 目録システムと機械化

第1章 標目論

- 1-1 標目・キーワード・ディスクリプター……………221
- 1-2 目録規則の標目の定義についての比較……………223
- 1-3 標目の機能……………225
- 1-4 標目の種類と例示……………227
 - (1)著者標目——(2)書名標目——(3)件名標目——(4)分類標目

第2章 目録システムの編成

- 2-1 記述ユニット・カード型による編成……………231
 - (1)記述ユニット・カード方式——(2)記述独立方式——(3)標目未
 記載ユニット・カード方式
- 2-2 基本記入方式による編成……………237
 - (1)基本記入方式とは——(2)基本記入記載形式の三つのパターン
 ——(3)基本記入方式による目録システムの編成
- 2-3 基本記入と書名ユニット記入……………244
 - (1)基本記入の定義——(2)基本記入と書名ユニット記入——(3)選
 択標目方式

第3章 英米目録規則(AACR)1967年版の特性とその改訂の動向

3—1	歴史的背景と特性……………	252
	(1)ルベツキイの分析——(2)AACR1967年版の構成と特色—— (3)北米版テキストと英国版テキストの相違——(4)ALA1949年 版とAACR1967年版との相違	
3—2	AACR1967年版のおもな条項について……………	258
3—3	AACR改訂版(AACRⅡ)の動向……………	262
	(1)AACR改訂版の標目選定——(2)著者性の検討——(3)改訂版 のその他の特徴	

第4章 目録の機械化

4—1	機械化の問題点とシステム設計……………	264
	(1)目録システム化のための機械化——(2)システム設計——(3)シ ステム設計の手順の問題点	
4—2	電子計算機システムとプログラミング……………	268
	(1)電子計算機システム——(2)電子計算機の機能——(3)プログラ ミングの過程	
4—3	HITAC20システムによる目録フォーマットの作成……………	274
	(1)文字データのプログラミング——(2)著者・書名・分類コード のリスト作成——(3)AACRによるカード・フォーマットの入 出力文	
4—4	目録の機械化の事例……………	280
	(1)MARCⅡ——(2)JAPAN MARCについて——(3)MA RCⅡフォーマットについて——(4)MARCのフォーマットの サンプル・レコード——(5)BNB/MARC(UK/MARC) について——(6)MARC(機械可読目録法)のおもな経緯	

索引……………	295
---------	-----

第Ⅰ部 序論と目録の機能

第1章 図書館システムにおける目録の役割

1-1 情報化社会と図書館

現代社会は過去の文化の集積をもちながら、さらにより複雑多岐な社会になりつつある。社会の構成や人々の考え方、知識が深くなるにつれコミュニケーションの関係もより複雑になってくる。それは、高度知識社会、イギリスで唱えられているメリトクラシー(meritcracy)の考え方に立つものであり、またダニエル・ベルやハーマン・カーンが言っている**脱工業化社会**(post industrial society)でもある¹⁾。物よりも情報や、ファッションなどに価値を置く社会でもあり、いいかえれば情報化社会とも呼ばれている。今日、その情報化社会発展の程度を計る尺度として**情報化指数**(information index)なるものが用いられている。具体的には、①コンピュータの普及と利用の度合、②高等教育の普及度、③全産業の中での知識集約型産業の比較、④ホワイトカラーの比重、⑤商品の多様化・高級化等が挙げられる。

林 雄二郎『情報化社会』では、(1)100人当たりの新聞発行部数、(2)100世帯当たりのテレビ台数、(3)1,000人当たりの書籍発行点数、(4)生徒数の人口に対する割合などを挙げている²⁾。これを米英西独仏伊の1965年の情報化指数を構成する7つの指標のそれぞれについて、5カ国を100とした場合、日本におけるそれぞれの指標はどの位置にあるかを示したのが図Ⅰ-1である*1。

このようにして、情報化社会は、人々の多様な情報の欲求、すみやかな情報の入手、グローバルな情報の伝達と受信などに進んでくる。図に示されているように、日本は1人当たり所得に比較して先進諸国の中でも情報化の程度が高い

*1 1973年の1,000人当りの日刊新聞発行部数の各国平均と日本の比較は、199.1に開きが增大している(国連統計年鑑1976年)。

1974年1人当たり国民所得59カ国対日本の比率は0.832

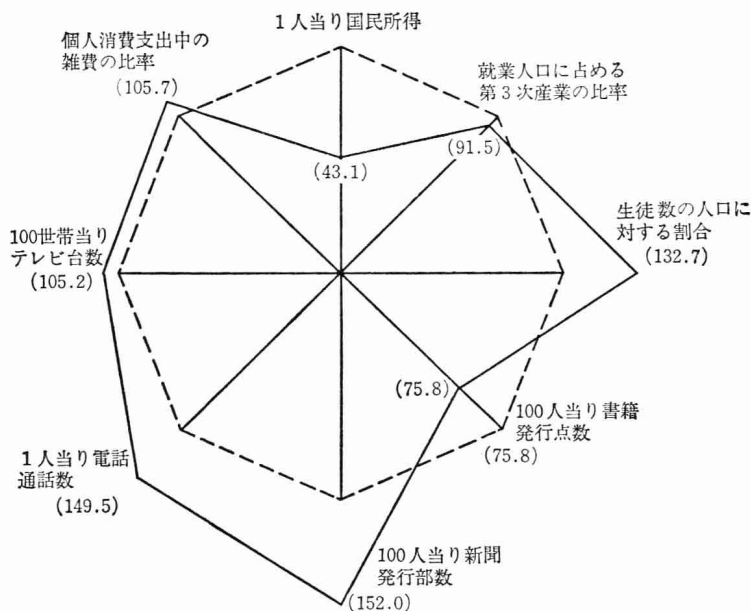


図1-1 1965年、情報化指数の各国平均と日本（実線）の比較
（林雄二郎『情報化社会』より）

と言えよう。これらの情報を伝えるコミュニケーション・メディアもさまざまなものがある。大きく分けて、デジタルのメディアである記録情報とアナログのメディアである映像情報にグルーピングされる。技術革新と所得の増大によって、ラジオ、テレビの普及率は1973年でラジオは1,000人当り日本は698台、アメリカ1,752台、イギリス697台であり、一方テレビは日本229台、アメリカ523台、イギリス309台の普及率である³⁾。家庭におけるニュース関係、スポーツ、天気予報などについての重要度は、完全に他のコミュニケーション・メディアを凌駕していると判断されるが、しかし、記録メディアは、まだまだトータルなコミュニケーション・メディアから考察するならば、その優位性を保持しているものと考えられる。

脱工業化社会あるいは情報化社会と言われる今日、図書館によって提供、サ

ーヴィスされる情報は現代社会の中での情報システムの一部門を担っているに過ぎない。そして、図書館サービスの中で、利用者に提供するコミュニケーション・メディアも主として記録された情報，すなわち文献情報を中心になっている。

図書館の機能をピアス・バトラー(P. Butler)は社会科学的立場から“人類の記憶を現存する意識中に移入する**社会的装置 (social apparatus)**”として定義した⁴⁾。人類多年の英知によって築き上げてきた文化，科学，技術は記録によって個人の記憶から万人への記憶と転化させた。図書館の活動およびサービスすべき目的はもちろん，単なる文献資料の提供ばかりでなく，ストーリー・テリング，各種集会，広報活動，通信によるレファレンスサービスなど，多元的な目的をもっている。また図書館は，新しい知識の創造や市民の教養を高めるため記録された知識を伝達する目的をもっている。それは，コールドウェル(W. Caldwell)がコミュニケーション・システム，教育システム，娯楽システムなどを図書館の機能的システムの中で列举しているに該当しよう⁵⁾。

しかし現代の図書館はさまざまな文献情報を，あるいはさまざまな種類のサービスを重視する**奉仕指向 (mission oriented)**が認識されつつある。これは多様な利用者の要求に対してより貢献しようとするならばコミュニケーション・システム，すなわち情報伝達をいかに行うかが最も重要な課題となり，それをめぐる方法論が論じられよう。それぞれの図書館は，館種別，対象者別，分野別によりさまざまな目的をもっているが，一つの図書館，あるいは一分野の図書館のみでは目的達成は困難である。個別の図書館，あるいは同系列の協力によって，よりきめの細かいサービスを考えることを縦軸とするならば，一方横断的に全国的，国際的，他の館種の図書館など，さらに他分野の情報システムのネットワークによる高次元な情報伝達サービスを横軸として，現代の情報化社会に対処するための図書館機能を昇揚(aufheben)させることが必要である(図I-2参照)。

コミュニケーション・システムでは，**情報伝達媒体**の文献情報をいかに処理し，サービスするかは，もっと広い視野で情報システム，他分野の図書館群

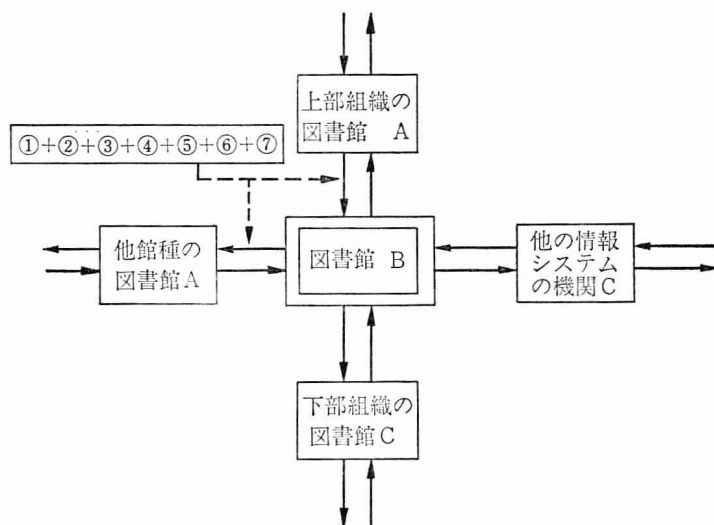


図 I-2 図書館の情報伝達サービスのための情報組織のネットワークの例

- ①一次文献（単行書・雑誌），②二次文献（索引・抄録・書籍），③速報性の文献（ニュース記事・レポート・特許），④数値・データの文献，⑤A.V.，⑥oralの情報，⑦館報・社内報・パンフレット

のトータルシステムの中で考察する必要がある。現在わが国でも行われつつある S D I (Selective dissemination of information) サービスシステムや世界科学情報流通システム (UNISIST) などは情報システムのネットワークの中でのサービスに類するものと言えよう。

今ここで、情報伝達のための通信技術の革新、電子計算機の普及と用途の拡大、情報量の増大と、情報要求のスピード化と多様化が現実のものとなりつつあり、まさに情報化時代の幕明けと言える。しかしながらわれわれの周囲に過度な情報、あるいは無用な雑多な情報が氾濫する社会でもあり、それからの情報をどのように選択し、価値ある情報を利用するかが大事である。それは資料をどのように組織化するか、あるいは情報文献をいかにコントロールするかに連なるわけである。

1-2 資料の組織化の背景

資料の組織化とは、資料を収集し、蓄積し、迅速、的確に検索するシステム

である。それはある一定の論理により資料が順序だてて排列され、利用者の要求に適合した資料が必ず検索できる仕組みになっていることである。シェーラ (Jesse H. Shera) は “Libraries and the organization of knowledge” でそれを「文献資料の組織化」(Bibliographic organization)と言っており、それは分類、索引法、抄録、情報検索の機械化において文献情報を利用するのに、その情報を組織するためのトータルの問題と実践と応用であるとしている⁶⁾。資料の組織化とは書誌の組織化と言い換えて同一の意味に理解してもよい。たとえばより具体的にこの組織化の名称は、アメリカおよびイギリスの図書館学教育課程の名称を調べてみると、“Organization and classification of knowledge”, “Organization of knowledge in libraries”, “Organization and processing of materiales” のカリキュラムが相当数の図書館学校に置かれ、講義内容は資料組織論になっているのが通常である⁷⁾。

資料の組織化について、シェーラに続いて定義をしているのはニーダム (C. D. Needham) であり、彼はこの“書誌の組織化”とは出版および出版物の組織化とコントロールに関するコミュニケーションの手段の一部であると述べている⁸⁾。要約すれば、資料の組織化は記録された文献資料を組織し、コントロールするものであると言える。

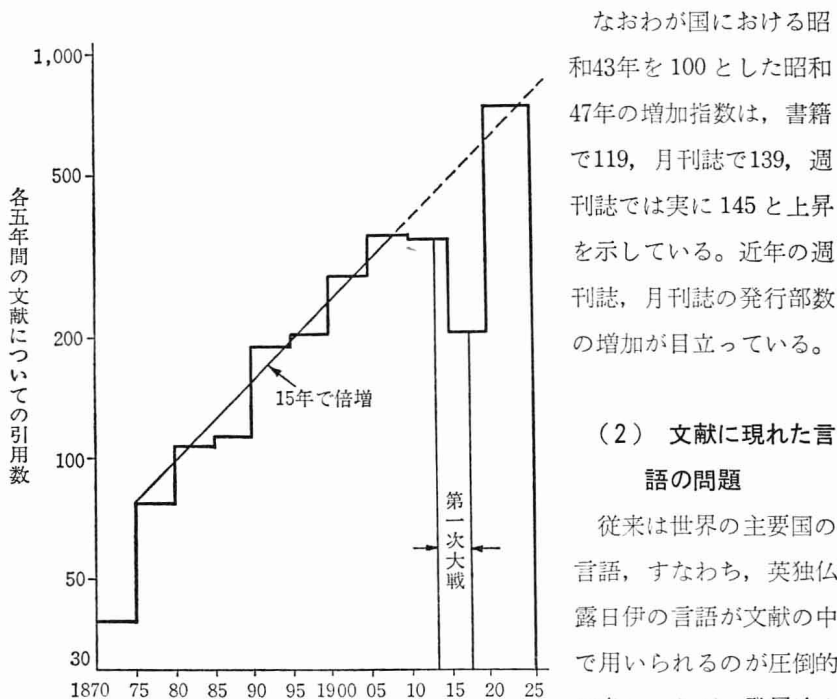
資料の組織化の際、さまざまなファクターを考慮しながら組織化すべきである。それは情報化社会に移行しつつある現代では、次の事柄に留意しなければならない。資料を処理、ファイルする面から、文献 (documents) の増大、言語の問題、文献の複雑性とさまざまなタイプ、出版の複雑性、アプローチの多様化が挙げられよう。このようなさまざまな要因を考慮し、どのように対応して知識を組織化するのが、シェーラ、ニーダムのいう“書誌の組織化”の考え方である。次にそれらの要因をあげてみよう。

(1) 文献の増大

情報伝達の記録媒体である印刷物の単行書、雑誌、さらに抄録誌に掲載される論文の量の増大は著しい。わが国の1,000人当りの新聞発行部数(1973年現

在)は537部で2人に1部の割合で新聞が発行され(世界統計年鑑), 単行書の発行点数でわが国は世界で第5位(1974年現在, 出版年鑑)を占め, 総発行点数は33,429点に達している。新聞発行部数の1日当りの推移を見ると1960年に2,444万部, 1972年に3,816万部, 1975年になると4,051万部に増加した(注, 朝夕刊セット紙を一部とみなし, 朝夕単独紙は一部と計算, 日本新聞年鑑)。これは, 科学定期刊行物は約15年経過するごとに文献数が倍増するというプライス(D. Price)の説が“Little science, Big science”の論文に載せられているが, 日本の新聞発行部数の増加と年数経過にも妙に合致すると言えよう9)。

下記にプライスのグラフを引用したので参照せられたい。



(2) 文献に現れた言語の問題

従来は世界の主要国の言語, すなわち, 英独仏露日伊の言語が文献の中で用いられるのが圧倒的に多かったが, 発展途上国の諸国からもさまざま

図 I-3 科学文献の半減期

な文献が出版され, ますます言語の処理が複雑になってくる傾向にある。

“ケミアブ”(chemical abstract)の中での収録論文数の国別の変遷を1913年

と1963年を比較してみると、上記の主要6カ国語以外の言語の分野は1913年の6.1%から1963年の16.1%に増加している。今後、経済、政治の関係で、東南アジア、中近東諸国との交流が深まり、必然的に各国語、種々の言語で記録された文献についての取扱いが問題となろう。

(3) 文献の複雑性

文献の複雑性には2つの意味が存在しよう。すなわち、文献の形態的パターンの複雑性と、文献そのものの内容が複合的な主題もしくは複雑な意味内容をもつという意味で、2通りに考察すべきであろう。後者の問題として、学問分野の進展、あるいは伝統的な主題分野を越えた研究が望まれる学際的研究(interdisciplinary approach)等にその複雑性の要因があげられよう。たとえば、文献の題名が複数の主題からなる複合主題のシェリフ等編『人文地理学とその隣接諸科学』や向坊隆・八十島義之助等著『技術革新と経済・社会の変貌』の例や多数の著者で書かれ、それらを編さんした出版などは主題の分析、分類の適用、目録および索引作業に十分に留意しなければならない。

前者の形態的パターンの複雑性は、通信技術の革新、コミュニケーションのチャンネルの多様化等により必然的に文献(種々な情報も含めて)は多岐にわたって種々なパターンになる。たとえば、単行書、雑誌、数値データ表、抄録、議事録、テクニカルレポート、索引、寄稿集、マイクロフィッシュ、コンピューター印字、シノプシス・ジャーナル、特許資料、広報パンフレット等枚挙にいとまもないほど数が多い。これらの文献を組織化するにはある一定の論理をもって、共通した処理方法を考慮すべきであろう。今後逐次刊行物に載る論文について二次資料的な性格をもつシノプシス・ジャーナル(synopsis journal)やアブストラクト・ジャーナル(abstract journal)等の文献形態がクローズアップされてこよう11)。

(4) 文献の求め方の複雑性

同一の文献でも利用者の意図、研究のアプローチが異なれば、文献を求める

意味が違はずである。同一主題の文献、たとえば、ある地方の中核都市の都市計画の論文は、行政官庁の企画立案者、都市工学者、運輸関係者、市場調査員などの関心の対象になるだろうし、同じ論文が、記事索引、主題書誌、目録に収録され、明らかに異なった意図で利用される。ニュース記事的な索引でも事足りるかも知れないし、一方都市計画の図面、数値データと概要（抄録）を必要とするものはシノプシス・ジャーナル等を要求するかも知れない。これらの問題で検索システム（目録、索引、分類など文献や資料を検索するため組織的に排列された一連の検索装置）は一つの系列だけでは不十分な場合が多い。そこで、文献への複雑なアプローチに対処するため図書館は、その組織網全体のサービスシステムやあるいは他の異なった情報サービスシステムの協力によって利用者の要求に応えなければならない。近年、図書館相互協力について精力的な運動が進められているのも、もはや1館だけのサービスでは多様化した利用者の要求には対応できない時代になってきたことを物語っていよう。ジョレイ (L. Jolley) は “The principles of cataloging” の中で “文献のアプローチとして目録の媒体による検索を考えるだけではなく、書誌的手段の全ネットワークの中で考え、さまざまなアプローチに対応しなければならない” と述べていることについて¹²⁾、常に考えなければならぬことである。

なお、情報の伝達媒体も文献のみの媒体とか、ことばによる媒体という単純なプロセスではなく、文献+会話とか文献+スピーチなどによって利用者の求める情報に対処できることが多い。伝達媒体のいろいろな組合せのパターン¹³⁾も資料組織化の際は考えねばならない。

このようなコミュニケーション・メディア (communication media) の中では、出版された媒体のほか、会話だけのものや、公開されないレポート、ノート、プレプリント類など数多くの伝達媒体が情報システムの中で占めている。このようなチャンネルを図に表したのが、ハッテリー (H. Hattery) のコミュ

*2 Information retrieval management, ed. by L. H. Hattery and others. American Data Processing, 1962. pp.11-12.

このハッテリーの図は、科学研究者がどのようなコミュニケーション・メディアを利用するかについて書かれたものである。